

世界の記憶にふれる
みんぱく収蔵品と研究者のまなざし

取材・執筆=小山茂樹



貝澤徹さん(右)の工房での調査・インタビューの様子。アイヌの伝統的な文様を活かした作品やアンティークなどが多く並んでいる。

1970年大阪万博の跡地、万博記念公園にある国立民族学博物館(みんぱく)。1974年創設以来、世界各地の文化を物語る膨大な収蔵品を蓄積してきた。そのなかから毎回一品を取り上げ、収集の背景や研究者の思いを通して、世界の多様な文化に迫る。

「アイヌの文化」展示場入り口に、途中まで開かれたファスナーをかたどった木彫がある。サイズは縦約120×横50×厚さ3cm。隙間からのぞくのはアイヌ文様だ。上部は木彫の盆、下部(背面)は衣服に用いられる文様で、それぞれ男性と女性の手仕事を象徴するという。作品名は「アイデンティティ3」。アイヌとしての自分を見せたり隠したりしながら生きる、現代のアイヌの姿がそこに刻まれている。

作者の貝澤徹さんは北海道道央の平取町二風谷生まれ。明治の名工、貝澤ウトレントクを曾祖父にもち、

イタ(盆)やマキリ(小刀)などを制作する一方、独創的な木彫作品を生み出すことに力を入れてきた。

みんぱくで「アイヌの文化」展示



正面

木彫「アイデンティティ3」

伝統から生まれるアイヌ現代アート



背面

場が公開されたのは、みんぱく開館2年後の1979年。アイヌ民族を先住民と認めた国会決議は、それから約30年後の2008年だった。

そうした時代に、アイヌ文化を日本の一地方文化ではなく、独自の民族文化として紹介していたことには大きな意味があった。

みんぱくでは2008年から常設展示のリニューアルが始まり、2016年の「アイヌの文化」展示

場で一区切りを迎えた。この展示場のリーダーとして再構成を中心的に担ったのが齋藤玲子さんだ。従来の展示が伝統的なものを前面に出していたのに対し、新しい展示では、現代を生きるアイヌの多様な文化や継承の姿を、工芸作品や映像で表したいと考えたという。貝澤さんの「アイデンティティ」シリーズは、その考えに重なるものだった。シリーズの第1作を見て強く心を動かされた齋藤さんが新たに依頼し、この「アイデンティティ3」は制作された。

齋藤さんはいま、現代のアートへとつながるアイヌ工芸の歴史や、アイヌ・コレクションの形成史に関心を寄せている。みんぱくに残されている戦前期の資料を、ほぼ毎年、アイヌ文化の伝承者や工芸技術者に見てもらう機会があるそう。古い資料の技法や文様をじかに見ることで、いまの作り手にとっての学びとなり、制作の手がかりにもなっていく。一緒に資料を見ると、齋藤さんも教えられることが多いという。

伝統は過去に閉じたものではない。博物館の収蔵庫にあった資料が、いまを生きる作り手の目にふれ、新たな表現へとつながっていく。木彫「アイデンティティ3」は、伝統を大切にしつつ個のメッセージをこめたアイヌ文化の現在を物語っている。